東方日輪録

くれいく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方日輪録

【Ｎコード】
Ｎ７２１１Ｙ

【作者名】
くれいく

【あらすじ】
生前？に何事も中途半端に終わっていた少女が新しい生を頑張るおはなし。

プロローグ

私はどうやら死んだらしい。原因は多分熱中症だろう。夏だったし、暑いというか熱い中歩いてたし。人通りもなさそうな場所だった。

わざわざ探してくれるような友人もいない。親は親で夫婦仲良くやってることだろう。

私は孤独だった。いつもいつもやることが中途半端で、迷惑をかけた。そうしているうちに、周りに人が居なくなった。

一人になって、悲しくなった。どうしてこうなる前にもっとしっかりしなかったのか。

一人になってからはいつもその事だけを悔やんだ。悔やむだけで、動こうとはしなかった。

その結果がこれである。死んだとすればもう悔やむこともない。このままぼうっとしていれば意識もなくなるだろう。

……死んだと言うなら、今のこの思考は何なのだろうか。あれか。なんでも中途半端で終わってた私だ。多分中途半端に死んで……いやいや。中途半端に死ぬってなにさ。半殺しじゃあるまいし。

とりあえず、閉じたままな感覚の目を開けよう。眩しいから奇跡的に死んでなかったりとか、神様（笑）とかの真っ白な部屋だったりとか、そういうのだろう。せーの。

「……まぶしい。いきてた？」

太陽が目に入ってきて、一瞬しか開けれなかった。もそりと立ち上がって辺りを見回す。

「……みごとなひまわりばたけ。うん、こんなとこしらない。たぶんゆめだろう」

独り言である。まぁ、どうせ誰もいやしな……

――夢じゃないよ。

声が聞こえる。というか頭に響く感じがする。

「えーと、幻聴頂きました？」

――残念だけど幻聴でもないんだ。

どうやら私の頭の中に妖精さんが住み着いてしまったようだ。

「私の中に住むなら家賃でも貰いたいな。あ、前払いでよろしく」

――住んでるわけじゃないけど、家賃というか説明でもしようか。

「説明ぷりーず！　どうなってんのよ？」

――かくかくしかじか、というわけ。

「ふんふん。……分かってたまるかドアホゥ！　ちゃんと説明しなさい！」

――……わかったよ。

「分かった。まとめると、君は君らであって、ここに咲いている向日葵。私は君らから生まれた？妖怪。人は定住しだしたばかり、と」

――そういうこと。でも君は妖怪なのに妖力より魔力のほうが多いね。

人外宣告受けました。ついでにタイムスリップ？宣告も受けました。

どうしろと。

「まぁ悩んでもしょうがないとして、妖力より魔力のほうが多いのか。どれくらいよ？」

――僕らには漠然と多いことしかわからないよ。自分でわからないのかい？

「わからないから聞いてるんだけど。まぁ確かに私に力があるのは感じられるけども」
これはあれだな。修行しろとかそういう雰囲気。せっかく生きてた上に長生きできそうなんだ。頑張って修行をやり遂げよう。
……でもその前に。
「食料と屋根のある寝床だよね」

1

ということで、食料とねぐら探しになるわけだ。その前にまずは私の状況を確認しようではないか。

今は恐らく紀元前くらいだと思う。だから狩りもしくは採取によって食料を得ることになる。

まずは狩り。私は妖怪らしいのだが、この細腕では獣を狩るなんてとてもできないだろう。

力がなければ多いらしい魔力。使い方がわからん。アウト。周りには向日葵しかなく、武器になるような物もない。というか獣に遭遇したところでこっちが狩られそうだ。

次、採取。毒とかやだよ？というか向日葵しかないの。共食い？も嫌だ。

……あれ、詰んでない？

い、いやまだだ！まだ何かあるはず……！ていうか起きてからしばらくたつけどたいしておなかへってない。

どういうこったい。向日葵の妖怪らしい。つまり植物。空には太

陽。あれだ、光合成でもしてんじゃないかと。
そう思ったところでなにかしら無意識にやってないか、自分の中を探るように目を閉じる。
うーん、何となく服から何か入ってきてる気がする。あれ、何か浮かんで……
「太陽光を操る程度の能力？」
わーい。ファンタジーっぽい？能力ゲットだぜー。
「……光全般じゃなくて太陽光って辺りが中途半端で私らしい。納得」
まぁ、太陽の光だ。人工のライトの光とか、火の光がダメなだけで、太陽の光ならたくさんあるじゃないか。
とりあえず光を操ると考えよう。
まずは屈折を試してみる。おぉ、なんか視界が歪んだ。次は思いっきり……。

ぐにゃぐにゃになって気持ち悪い。１話目で吐く女の子とか嫌よ。
……ん？なんか変なもの受信したきがする。
さて、何となくだが使い方がわかってきた。花、太陽の光。攻撃。とくれば……。えっと、光を集めて、ちょっとやりにくいな。あつまれあつまれー。こんなもんかな？よし。

「ソーラービーム！」

ジュッ

「……いやいや。ジュッて。真っ黒どころか溶けてるし……」

要加減。

現実逃避に話を戻そうね。なんだっけ、えーと。食料どうしようからの光合成フラグか。そうだそうだ。多分服に何かあるんじゃないかと。私じゃよくわからん。わからないのなら聞けばいいのよ。というわけで。

「向日葵さんや。ちょっと聞きたいことができたんだけど」

――いいけど、土溶かさないでくれないかな？燃え移ったら大変じゃないか。

「すいませんでした。予想と違う結果になって私もびっくりです」

――で、何なの？

「いやね、この服ってどうなってるのかなと」

因みに今着ているのは薄い緑のワンピース。髪は金色に。長さは…背中くらいかな。次、おそるおそる下を見る。そこには大きくも小さくもないやはり中途半端な大きさのふくらみ。というか体形全く変わってないな。容姿は……わからん。

――その服は君の妖力、魔力を使って編まれたものだよ。汚れはつかないし、穴が開いたり破れたりしても妖力なり魔力なり込めれば元に戻る。

「つまるところ体の一部に等しいわけだ。それならまあ納得がいく」

葉緑素の代わりにでもなるのだろう。私の力で編まれたってのなら色とか変えれるのかな。濃くしたら光合成が活性化……

思いっきり濃くしたらお腹いっぱいになりました。本当にありがとうございました。食料問題解決。おいしーものがないからしばらくこうするしかなそうだ。

さて、それなら能力で何ができるかためそうじゃないの。

で、日が暮れた。何ができたかっていうと、自分の周りの光を屈折させて見えなくする。まだ自分がいるとこは不自然になっているらしいので要練習だ。
次に、某龍球の目眩まし技。さっきの屈折に疲れて遊び程度にやったら一発でできた。でも光がまだ弱いので要練習。
あれ、女の子がでこ出してぴかーってやだな。せっかくできたのにお蔵入りフラグが早速立ちました。

で、完璧に太陽が沈んでしまったため、することが無くなる。横になろう。
空を見上げる。真っ黒な空。まんまるおつきさま。ちりばめられている星々。現代では考えられない光景だ。
あ、晴れているので一番大きい向日葵の下で寝てます。目印になるしね。ついでに川教えてもらって顔確認しました。髪が金色になって目が茶色になっていたこと以外は変化なし。そこら辺に居そうな特別可愛いわけでもない顔がありました。ちくしょう、こういうときは可愛くなってるもんでしょうに！
……愚痴ってもしょうがない。夜は太陽がなくてあまり調子がでないし、寝よう。
「夜に使えないってかなり不便だなあ……。夜でも太陽がでてればいいのに」

まるい月を見る。あの光も使えるなら――って月の光って元々太陽の光じゃん！

ガバッと起きてから昼にやったのと同じことをする。

結論、かなり弱くなるけどできました。姿消しならむしろ楽にできたが。

……どちらにせよ、使えたものではないので多いらしい魔力で魔法を覚えよう。そうしないとつらそうだ。

「一日目終わり。また明日ね」

そういって眠りについた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7211y/

東方日輪録

2011年11月21日20時57分発行